

研究可能テーマ

研究可能テーマ	研究指導者	受け入れ可能院生数
(1)川崎病の病因解明研究 川崎病は原因不明の小児特有の疾患であるが、数種類の細菌がその発症に関与することが報告されている。患者より分離された細菌群とその産生物質に対して分子生物学的・免疫微生物学的解析を加え、川崎病の病因・病態解明を試み、原因療法の開発を目指す。	永田教授	1
(2)早産の原因となる妊婦膣フローラの解析 昨今、早産の原因として、絨毛膜羊膜炎およびその前駆感染として細菌性膣症が注目されている。膣フローラ（細菌叢）を分子生物学的手法にて解析して、早産の原因となる病原体を割り出し、フローラのコントロールにより、早産を予防できるかを検討する。	永田教授	1
(3)新生児未熟児の視知覚認知発達とその障害 発達促進に必要なサポートについての検討 新生児未熟児医療の発達により超未熟児などの救命が可能になり、乳児死亡率は著しく低下している。が一方で周産期に濃厚な医療を要した児で広汎性発達障害など軽度発達障害などの発生も多いと報告されている。それらの実態を調査すると共に、乳児の視覚認知、対人関係の発達評価など従来の発達テストよりさらに詳細に評価する方法を確立、未熟児出生の児などにみられる発達特性を明らかにし、どのような発達サポートが有効などを検討する。	平澤准教授	1
(4)小児てんかんの外科治療の適応に関する研究 15歳以下でてんかん外科治療を受けた症例の発作予後、知的予後を検討し、各症例のてんかん発症年齢、発作型、画像診断、脳波診断を基にその最もよい適応を調べる。	小国教授	1
(5)難治性小児てんかんにおける神経心理学的研究 難治性小児てんかん患者の知的障害の発展過程を調べるために高次脳神経機能検査を継時的に行い、てんかん源性焦点の部位と選択的高次脳神経異常の関連を検討する。	小国教授	1
(6)てんかん発作の神経生理学的研究 てんかん発作、特に小型運動発作の神経生理学的病態を検討するために、発作時ポリグラフをA/D変換し、コンピュータに記録、脳波解析装置を使用し、運動症状の始まりを起点とし脳波を加算し、その脳波発射と運動症状の起点との潜時を計算する。	小国教授	1
(7)小児がんの新しい治療法の開発（トランスレーショナルリサーチ） 医師免許取得者以外でも可能 小児がんの治療に関するトランスレーショナルリサーチ（基礎から臨床への橋渡し研究）として、最近注目されている分子標的療法、キメラ抗原受容体発現T細胞CAR-T）療法、免疫チェックポイント阻害薬療法、腫瘍溶解性ウイルス療法の基礎を学び、さらに、それを臨床応用するための過程（基礎実験、臨床試験、治験の計画書の作り方、データの取り方、薬事承認までの過程など）を学ぶ。	鶴田准教授	1
(8)小児がんの新しい治療法の開発（医師主導治験） 小児がんの治療に関するトランスレーショナルリサーチ（基礎から臨床への橋渡し研究）として、最近注目されている分子標的療法、キメラ抗原受容体発現T細胞CAR-T）療法や免疫チェックポイント阻害薬療法、腫瘍溶解性ウイルス療法の基礎など、成人に應用されているが小児適応がない薬剤を臨床応用するための医師主導治験の計画と実践について学ぶ。	鶴田准教授	1
(9)難治性血液疾患に治療法の開発 難治性溶血性貧血など、現在治療法が確立していない血液疾患に対する新しい治療方法の開発として、遺伝子治療、造血幹細胞移植術など分子療法、細胞療法の技術を用いた治療可能性を検討し、臨床応用への過程を学ぶ。	鶴田准教授	1